

平成27年度愛知県学校図書館研究会高等学校部会 名瀬地区研究会 第3回研究会<報告>

平成27年12月1日(火) 愛知県図書館大会議室にて、名瀬地区研究会第3回研究会を実施しました。
多くの学校の先生方に参加していただき、充実した研究会となりました。

1 講演会

演題 「高校生のビブリオバトル：これまでの歩みと現在」

講師 福永 智子 氏

梶山女学園大学文化情報学部文化情報学科教授，同大学図書館長

福永智子先生は、昨年度、梶山女学園大学で行われた高校生ビブリオバトル東海大会の運営の中心となられた方です。御専門は図書館情報学で、最近は「明治時代の音読文化」「耳の文化・ライブの時代」を研究テーマとされています。

(1)ビブリオバトルとは

<公式ルール>

- ① 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
- ② 順番に一人5分間で本を紹介する。
- ③ それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
- ④ すべての発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

ビブリオバトルは、2007年に当時京都大学の研究員であった谷口忠大氏が、ゼミの運営において、輪読会や論文紹介では勉強会として盛り上がり欠けるため、他にいい本に出会える仕組みはないかということで生み出された。その後、関西圏の大学を中心に成長し、2010年にはビブリオバトル普及委員会が発足した。同年、「ビブリオバトル首都決戦」の第1回大会が開催され、2012年には、「Library of the Year」2012大賞を受賞、2013年には全国47都道府県での開催が確認された。こうした広がり背景には、スマホなどの情報ツールの普及に伴った大学生の読書離れが問題視されたことや、日本国内では年間8万種類近い出版点数があるものの、面白い本に出会いにくい時代であることなどがあげられる。また、それまでの読書推進活動はどちらかといえば子どものイベントであり、読書から離れてしまった大学生を読書に引きつける方法は非常に限られていた。そういうなかで、ビブリオバトルの特長は大学生を対象とする活動という点にある。



さらにビブリオバトルには、参加者で本の内容を共有できる「書籍情報共有機能」、スピーチの訓練になる「スピーチ能力向上機能」、いい本が見つかる「良書探索機能」、お互いの理解が深まる「コミュニティ開発機能」の4つの機能がある。しかし、どのようなタイプのビブリオバトルにおいても4つの機能が同じ割合で現れてくるわけではない。例えば、トーナメント型で行われる大きなバトルでは、「スピーチ能力向上機能」がよく働くが、「コミュニティ開発機能」の働きは弱いと考えられる。一方、規模が小さく、よく知った仲間うちで定期的に行われるような日常型のバトルでは、「コミュニティ開発機能」がよく働き、参加メンバーの人となりや知識や背景について知ることができる。

ビブリオバトルの要は、谷口氏自身が述べているように「知識は人に紐付いている」という考えをもとに設計された活動であること、人を介して知識（書籍）の楽しさを知るとともに、人についても知ることである。

2010年に第1回大会が開催された「ビブリオバトル首都決戦」は、年に一度のビブリオバトル最大のイベントで、全国で開催された予選会を勝ち抜いたバトラーが東京に集結し、グランドチャンプ本を決定するものである。開催を重ねるごとに規模が大きくなり、2013年の参加者は3300人となった。

(2) 高校生のビブリオバトルへ

高校生のビブリオバトルは、大学生のビブリオバトルの普及を受けて、首都圏と関西地区を中心にはじまったが、「高校生書評合戦首都大会2013」は関東の高等学校のみの参加であった。しかし、平成26年度に、ビブリオバトルの歴史上初めて「全国高等学校ビブリオバトル2014決勝大会」が、全国9カ所での地区予選会と併せて開催されることが決定した。東海地区では、愛知・岐阜・三重・静岡4県を対象として「全国高等学校ビブリオバトル2014東海大会」が名古屋で開催されることになり、本学（椋山女学園）は「特別協力」という立場で会場を提供し、運営に協力することになった。

愛知県における高校生のビブリオバトルは、学校や公立図書館を中心に普及していった。愛知県下の私立高等学校では、運営実績30年以上の伝統ある読書会（私学合同読書会）があり、平成26年度はその「第72回私学合同読書会」が「第1回ビブリオバトル2014」として開催された。当日は120名以上の参加者で、開始前から会場（東海高等学校）には活気があり、総合司会以外の運営はすべて参加の生徒が行った。11名のバトラーが順に本を紹介し、オーディエンスが選んだチャンプ本は『人間失格』であった。

高校生のビブリオバトルは、いい意味で大学生や大人のように洗練されていなかったが、とにかく活気があり、オーディエンスが実によく質問をする。あとで調べればわかるようなことでも気軽に手をあげて聞き、のびのびと素直に意見を述べている。「人を通して本を知る。本を通して人を知る」というビブリオバトルの本質がここにあるように思われた。

平成26年9月、本学を会場に東海4県22校（愛知県は13校）の代表をバトラーとして迎え、「全国高等学校ビブリオバトル2014東海大会」が開催された。優勝者は静岡県代表で、チャンプ本は『冷たい校舎の時は止まる』（辻村深月著、講談社）であった。これはその後の決勝大会でもチャンプ本に選ばれた。

5分間のプレゼンテーションの準備はかなり大変なようであるが、それだけ何度も深く本を読むことになり、デジタルネイティブの大学生や高校生にとって、じっくりと1冊の本に向き合うことは有意義であると思われる。ただ、高校生の大会では学校の公式行事として位置づけられるため、大学生の大会と比べると「勝つ」ことに重点が置かれてしまう傾向が見受けられる。どのように高校生のビブリオバトルを運営すれば、大学生のように個人で参加できる身軽さや自由さが実現できるのかが今後の課題と思われる。

(3) ビブリオバトルは読書につながるのか？

「全国高等学校ビブリオバトル2014東海大会」参加者へのアンケート結果から見ると、ビブリオバトルに参加して、本を読みたい気持ちになった生徒は8割もいた。これにより、本好きの生徒たちに対するビブリオバトルの有効性が確認された。したがって、今後もビブリオバトルを開催していく意義があるといえる。また、読みたい気持ちになった生徒のうち、少なくとも7割が実際にその本を入手して読んでおり、入手経路は約半数が図書館であった。このことは、学校図書館や近隣の公立図書館が「読書推進」という観点から、ビブリオバトルで紹介された本を用意し、できればテーマ展示をすることがきわめて重要であることを示唆している。さらに、「日常型」のビブリオバトルをそれぞれの高等学校などの小さいコミュニティで、併せて実施することが望ましいと考えられる。

一方で、そもそも本が好きではない人たちが、ビブリオバトルに参加するとどうなるかが重要な問題であると言えるが、それは今後の課題である。

2 分科会

4つの分科会に分かれて研究協議を行いました。以下は、第1回と第3回の分科会のまとめです。(第2回研究会では分科会を実施せず。)

	テーマ	第1回	第3回
第1分科会	図書館の充実	図書の購入・廃棄・除籍について	選書について
第2分科会	図書館を利用した活動の充実	広報活動や展示について	
第3分科会	図書館の新しいあり方	読書活動の推進について	図書委員の活用について
第4分科会	魅力ある図書館に向けて	各校の様子と課題について(特別支援学校)	

第1分科会 研究テーマ「図書館の充実」

【第1回研究会(6/17)】…「図書の購入・廃棄・除籍について」

1 図書の購入について

- ・どの学校も近年予算が減らされており、十分な金額が与えられている学校はごく僅かだった。
- ・教員からのリクエストが少なく、また1人の教員から同じジャンルの購入希望図書がたくさんあると、どこまで購入すべきか迷う。

・調べ学習用の本を色々揃えたり、同じ本を複数揃えたりするのは予算的に苦しい。

→学校の近くの図書館に事前に集めて欲しい本のテーマを伝え、図書館側が名古屋市中の図書館より100冊程度をおまかせで集めてくれる。それを3か月間借りて学校内のみ利用可にする、という方法をとっている学校もあった。ただし、図書館が学校のそばにないと難しい。また、調べ学習の参考本は貸し出し禁止にするところもある。

・課題図書は複数購入するか、という質問に対しては、ほとんどの学校は1冊ずつのみ、という答えだった。

・同窓会からお金を集めて図書運営費に回したいが、やっているところはあるか。

→有志のOG・OBが図書カードを寄贈してくれてそれで本を買う、という学校があった。また、教員に不要の本があったら寄贈してほしいとお願いしている学校もあった。

・全校生徒に読書感想文を課している学校で、事前に全教員に読書感想文にオススメの本を聞き、なかったら買い足す、それを一覧にして各クラスに配布する、ということを行っている学校もあった。

・送られてきた寄贈本の扱いについては、蔵書に加えない場合は廊下などに「ご自由にお持ち下さいコーナー」を作り、置いておき、ある程度期間をおいてからリサイクル業者がくるタイミングに紐で縛って捨てる。



2 図書の廃棄・除籍について

・学校印を消すべきなのか、廃棄印を押すだけでよいのか、学校によって方法が違い戸惑う。事務提要には廃棄印のみでよいとあるが、学校によっては学校名をマジックですべて消すといういわれる。一度事務の方でしっかりと手順を統一してもらいたい。

・廃棄基準を模索中の学校が多いが、基本は紛失して時間が経った本は除籍か廃棄にしている。古くて傷みの激しいものや時代に合わないものなどをメインに廃棄している。

・毎年～数年ごとに百冊単位で廃棄している学校が多い。

・廃棄にする本を選んで一覧表を作成し、専門分野の教員に廃棄本としてふさわしいか確認してもらってから廃棄にまわすので、廃棄本の選定に時間がかかる。夏休みなど長期休みを利用にてやることが多い。

【第3回研究会（12/1）】…「選書について」

1 予算について

- ・予算が50万円以上の学校も何校もあったが、多くがここ数年で予算が減額されて不足しており、2年前の半額に減った学校もあった。
- ・修学旅行の行き先が変わり下見の費用がかかるため、図書館の雑誌や新聞が減らされることになった例もある。
- ・備品費の予算は年度末に余った分を回してもらい購入する学校もある。反対に、備品費の余りを事務に返す学校もある。

2 各校の選定方法・選書基準

- ・各教科に予算を配分し希望図書を出してもらう。
- ・教員からの推薦。
- ・基本は司書が選び、時々生徒・教員のリクエストをうける。
- ・図書委員から図書選定係を作りSLBAから選ばせる。
- ・委員会ではなくて部活としての図書部があり、部員を本屋に連れて行き選書させる。
- ・年2回各教科の代表を集め、図書運営委員会を開く。各教科は1万5000円。
- ・新聞の書評や各種新刊案内、雑誌などの記事から選ぶ。
- ・テレビ番組を参考にすることも。
- ・夏の研究会で作成する『収穫本』から他校のおすすめ本を参考にする。
- ・工業高校では受験者が少数の資格の問題集を購入している。本来図書館の予算で問題集などは購入したくないが、経済的に余裕のない生徒のために大多数が受ける資格以外の問題集を随時購入している。
- ・値段が1000円以上のライトノベル（例『ログ・ホライズン』『ゲート』）を、読みたくても生徒個人で買いそろえるのが厳しいので、図書館で購入している学校も。

3 リクエストについて

- ・生徒リクエストの数があまりないのでほぼ受入れている学校もあれば、リクエストがありすぎて選定している学校もある。
- ・漫画、ライトノベルは断る場合が多いが、信頼する生徒にライトノベルの内容を確認し、ほぼ購入する学校もある。
- ・教員のリクエストについては、専門的すぎて購入するか迷い、蔵書全体とのバランスを考慮して購入しなければと考える学校もあれば、専門的なものばかりでなく、生徒に読ませたいような本を出してくれてとても参考にしているという学校もある。

4 その他

- ・推薦者、選定者が限られているので、入荷する図書にジャンルの偏りができる。
- ・備品の候補がなかなか決まらない。
- ・現在40種類程度雑誌を購入しているが、管理職から多すぎるのではといわれ、減らすべきか迷っており、他校は雑誌をどの程度買っているか知りたい、という質問が出た。
- ・出版年の古い古典名作を新版などの読みやすく生徒の手に取りやすいものに買い替えたいが、予算の関係でつい後回しにしている。
- ・文芸以外のジャンルの選書方法に迷っているという質問に対し、ネットばかりに頼らず、本屋巡りなど自分の目で確かめて選んでいる、というアドバイスがあった。

第2分科会 研究テーマ「図書館を利用した活動の充実」

【第1回研究会（6/17）】…「広報活動や展示について」

1 広報活動について

- ・図書館報を年に1回～2回発行している学校や、図書委員が編集する図書館だよりなどを毎月発行しているところも多い。また、司書や図書部の教諭が本の情報などを載せて通信を発行している学校もある。

その他、掲示板を活用（広報活動ポスターを作成して掲示する）している学校もある。

広報の中身としては、新入荷の書籍、時事もの（映画やドラマの原作本）、各種受賞作品（本屋大賞ノミネート作品・直木賞・芥川賞など）といった書籍の紹介から、読書感想文コンクールの案内、生徒・教職員のおすすめ本など各学校趣向を凝らして制作している。

2 展示について

催事や行事に合わせて行うことが多いが、学校によっては図書館独自の展示を行っているところもある。毎月、テーマを決めてそれに沿った本を展示したり、季節ごとのイベントで展示を行う学校も多く見られた。また、修学旅行や授業とリンクした展示を行う学校もあった。

年間を通じて企画展示を行う（年度の頭に年間の展示内容・スケジュールを確定）学校、常設的に本を紹介するコーナーを用意している学校もある。

部活動（写真部・美術部など）や個人作成の作品を展示したり、「総合的な学習の時間」で調べた学習成果について展示するところも多い。

図書委員によるPOPを展示するところも増えつつある。中には、課題で作成したおすすめ本紹介カードをストックしておき、ポスターに仕立てたりしてPOPとして利用している学校もあった。



3 まとめ

広報活動や展示は、図書委員が盛り上げてくれるという学校と、教師が準備をほぼ済ませておかないと前へ進まないという学校に分かれた。

図書委員の活動を、完全に区分けしている学校もあれば、総当たりで全てのイベントを全図書委員で行う学校もあった。

また、各学校の抱える悩みとして、

- ・書籍のピックアップに限定され（場所と時期の問題で）、所謂「展示」は行えていない。
- ・図書委員の作業時間が確保できない。
- ・図書館の利用方法がほぼ自習室とかわらない（新着本の案内をしても貸出につながらない）。
- ・図書委員会をどのように運営するか。
- ・入学時の図書館の利用を促すオリエンテーションの改善策。

などが挙がったが、やはりどの学校でも聞かれるのが「入館者数・貸出冊数の増加にどうやってつなげるか？」ということだった。これについては、広報や展示活動だけではなく、選書から運営方法に至る全ての点を結びつけていく必要があると感じた。

【第3回研究会（12/1）】…「広報活動や展示について」

第3回から、第2分科会に参加した学校もあり、各学校で行っている広報活動や展示の内容などを報告するとともに、4月から今日までに行ったことの結果報告や、広報掲示物の扱いについてなど、深いところまで掘り下げて話し合うことができた。

展示や掲示については、多くの学校で図書館入り口外まで利用している学校が見受けられた。（これは、学校の造りや、図書館の位置にもよる）

図書館のあり方については、本を借りる場なのか、生徒の憩いの場なのかなど、各学校の取り組みの特色がよく見えた。もちろん、利用者数の増加・貸出冊数の増加は頭を悩ませる点ではあるが、どの学校でも明るく面白みのある空間、リラックスしてくつろげる雰囲気作り、生徒の居場所作りといった点に尽力している。

図書館を利用「する」のを待つのではなく、「させる」活動を充実させている学校もある。PCを有効利用し、色あせた本カバーのリタッチ（フォトショップを使い、スキャンしたカバーに色補正をかけて新品同様なきれいなカバーに付け替える）などをして、古ぼけた印象を払拭したり、図書館のマスコットキャラクターを作って、POPや貸出しカード、通信など色々な場所で活用している例があった。

図書委員が、活動に達成感を持つように、アイデアや完成させる（手間のかかる）ところは教員が行い、表だって目立つ部分（イラストを作る、カラーリングする等）を生徒に任せることで委員のやる気を引き出している学校もあった。

各学校で行っている、通信、図書館だよりの配付については、教室掲示のみか全員配付かによるメリットデメリットについて議論した。教室掲示のみだと生徒の目に触れる機会が圧倒的に少なくなり効果が薄い。逆に全員配付（教職員含む）にすることで全員に情報を行き渡らせることが可能だが、過去に「紙の無駄遣い」と苦言を呈された先生もいた。また、配付にした場合、それを誰が配るのかも学校によって様々で、担任経由・各クラスの図書委員・図書部の先生など各校様々であった。

第3分科会 研究テーマ「図書館の新しいあり方」

【第1回研究会（12/1）】…「読書活動の推進について」

各校の読書活動についての発表・意見交換を行った。

- ・オリエンテーションや広報誌
- ・POPコンテストへの参加

名古屋学院大学の出張講義及び、大学が主催する『POPコンテスト』に参加した。

- ・朝の学習の時間を使った朝の読書

読書感想文コンクール指定図書の要約や芸術鑑賞会の資料などを朝の学習の時間で行う。

出張図書館として、各クラスの図書委員が選定した朝読用の本をクラスに配置した。

- ・ビブリオバトル

誰でも入りやすいように廊下から見るができる教室で行った。オーディエンスも交えた交流ができた。

- ・POPリレー

先生のおすすめ本をPOPにして一冊のアルバムに貼っていく。読書に対する教師間のコミュニケーションが生まれており、普段図書館に来ない生徒や教員にも影響があった。

- ・読書週間の行事（ブックトーク・クイズ・朗読会）
- ・図書委員と文芸部共同の読書会
- ・ポイントカード

図書の紹介文を応募し、提出数によりポイントが溜まると粗品が贈呈される。

運動部に参加している図書委員の展示などを見てもらうということで、運動部の生徒を図書館に呼び込むなどの意見や読書感想文コンクールについての話も行うことができた。

【第3回研究会（12/1）】…「図書委員の活用について」

・カウンター、展示、広報誌、行事、書架整理、読書会など役割を分担して運営している学校が多数あった。

- ・文化の担い手としての図書委員。

- ・推薦文200字程度や諺、格言などから一文を選んでポスターにする。

・図書館のレイアウトや図書委員の興味、関心のある分野についての紹介する棚など。

- ・行事では図書委員を中心に一般の生徒も巻きこんで行う。

・図書委員の中には本が好きとは限らない生徒もいるが、それぞれに得意な分野や作業などを見つけることにより、図書委員としてのプロフェッショナルな部分を高めることができる。

また、葉っぱ型の用紙に1年全員の本の紹介POPを書いてもらい1本の木とする企画や1袋に3冊程



度テーマやジャンルによって選んだ本を入れて貸出する本の福袋などの企画の紹介もあった。

研究会で他校の紹介されていた活動を取り入れている学校もあり、積極的な意見交換を行うことができた。

第4分科会 研究テーマ「魅力ある図書館に向けて」 ——各校の様子と課題について(特別支援学校)——

第4分科会は、特別支援学校グループとなっているが、特別支援学校の校種によって実情はかなり異なっている。そのため、それぞれの学校の現状や課題について持ち寄り、図書館を利用しやすくする工夫、運営のあり方について取り組みを考えていくこととした。

【第1回研究会（6/17）】 各校が持参した資料を元に情報交換を行った。

- ・蔵書と年間予算について

昨年より減少の所が多かった。主に課題図書を購入し、蔵書は絵本、児童書が中心である。愛知県図書館の貸出を利用して補う学校があった。

- ・図書だより発行状況、行事について

図書だよりは年間2回以上が多く、クラス配付、児童生徒配付など学校により異なる。

年間行事として、年2回図書館まつりや季節コーナーを設けたり、読み聞かせを昼の放送で行ったり、読書月間を設けたりと色々取り組む学校がある。

- ・廃棄について

年1回～2回蔵書点検を行った際、不明本や破損のひどい図書を廃棄処分にする学校がほとんどであるが、何年も廃棄をしてない学校もあった。

【第3回研究会（12/1）】 各校が持参した資料を元に情報交換を行った。

- ・図書に関心を持つために

学校図書館活性化事業に参加し、生徒に読書をする機会を作り、生徒たちのリクエストで選定をした学校があった。

全校生徒対象で年2回のビブリオバトルや、朝の読書タイム、一週間に一度は本を借りる習慣など少しでも生徒が興味をもつことができるように取り組む学校が多かった。

どの学校も予算が少ないながら、委員会や図書室だより、図書室のレイアウトの工夫をして魅力のある図書室にしようとしていた。

- ・今後の課題について

予算がないため内容が古く時代に合っていない図書を廃棄し、新しい図書を購入するのが難しい現状の中、どのように取り組むと良いかが今後の課題としてあがった。

